

吉備国際大学
 社会福祉学部研究紀要
 第12号, 125-131, 2007

多和田葉子の「エクソフォニー」体験

清水 光二

Yoko Tawada's Experiences of "Exophony"

Koji SHIMIZU

Abstract

Yoko Tawada left for abroad immediately after she had graduated from college. She settled down finally in Hamburg, Germany. But as time went on, she began to feel that her mother tongue was disappearing gradually. She worried that she had no language anymore to express herself properly. Then, losing the mother tongue led to the crisis of identity.

Tawada tried to keep on standing in the "trench" between Japanese and German. As time went on, she managed to find out her own language, which was sort of different from the both of ordinary Japanese and German, and which could relativise and reduce the stable value of our native languages. The new language created by Tawada went way beyond the limits of the mother tongues and tried rebuilding the relations among words, things and meanings in this world.

Key words : Exophony, Muttersprache, Sprachmutter, Trench

キーワード : エクソフォニー、母語、語母、溝

1982年、21歳の時、わたしは大学の卒業式にも参加せずにインドへ出発し、22歳の誕生日には、パトナの駅でボンベイ行きの切符を買うために、長い列の一番後ろに並んでいた。ひどく暑かったのを覚えている。……

インドからイタリアや当時の<ユーゴスラビア>を通過して、ある日、やっと目的地のハンブルクに着いた。わたしはここにある書籍取り次ぎ及び輸出をしているグロッソハウス・ヴェーグナーという会社で研修社員として二年ほど働くつもり

で来たのだが、一番の関心事は、やはり言葉だった。ドイツ語がべらべらになりたいというのではなく、何かふたつの言語の間に存在する<溝>のようなものを発見して、その溝の中に暮らして暮らしてみたいと漠然と思っていた¹⁾。

ドイツだけでなく日本においても数々の文学賞に輝いている、現代作家多和田葉子の「エクソフォニー」への旅はこうして始まった。「エクソフォニー」とは彼女が自著のタイトルにも使った言葉だが、自身の説明によると「母語の外に出た状態一般

を指す」ものであるようだ²⁾。本論の目的は、自己の存在をあらゆる面で規定しているはずの母語（あるいは母国語や国語）の外に出てものを書くという作家として彼女の試みが、文学のみならず、歴史的・社会的にみて現在の私たちにどのような意味を持っているのかを検討するものである。

*

最初に、多和田が乗り越えようとした母語（あるいは母国語や国語）というものが、そもそも歴史的にどのように発見され形成されてきたかを、田中克彦の『ことばと国家』を参考にここで改めて確認しておきたいと思う。

田中の言によれば、母語の概念とは次のようなものである。

生まれてはじめて出会い、それなしには人となることができない、またひとたび身につけてしまえばそれから離れることのできない、このような根源の言葉は、ふつう母から受けとるのであるから、「母のことば」、短く言って「母語」と呼ぶことにする³⁾。

こうした母語概念が歴史的に必要なとされた背景には、ローマ世界におけるラテン語と地域の俗語との対立があったと田中は言う。当時ラテン語は高い教養を身に付けた知識階級のみが読み書き可能な特殊な言語であり、一般の人々は地域の俗語を自分たちの言葉として日常的に使用していた。そのため従来は、ラテン語を使用する階級の人間が俗語を話す人々を一方的に蔑んでいたのだが、それがある時期から庶民が話す俗語の価値を知識階級のラテン語よりも高く評価しようとする逆転現象が現れ始めた。田中は、俗語の優位性を体系的に論証したのは歴史上ダンテが最初であったと述べている。

ダンテは、ラテン語を身につけるためにはいか

を述べ、それが使えるようになるのはごく一部の

人だけではないか。それに比べれば俗語は、子供たちにことばの能力が芽生えるや否や、その環境から自然に身につけるものである。「我々はそれを計画的に教え込まれなくとも、乳母のことばをまねながらうけつぐのである。」それに対してグラムマティカ、すなわちラテン語は特別に学ばねばならないから、二次的で不自然なことばであるという⁴⁾。

ここではすでに母語の観念が明瞭に言及されており、以後ロマンス語の世界では俗語を「母語」(materna lingua) と呼び、他方のラテン語を「父のことば」(patrius sermo) と呼んで対立的にとらえる習慣が生まれたようだ。

次に時代がさらに近代に及んでくると、国民国家思想が誕生する中で母語は新たな解釈を与えられることになる。

1539年の勅令において「母のことば」と呼ばれたフランス語は、いまあらたに革命によって「国家のことば」(langue nationale) となった。言語史の目からフランス革命の性格を規定すれば、それは「母語」を最終的に「国家語」に仕上げたできごとととらえることができる⁵⁾。

フランス語の“langue nationale”、あるいはドイツ語の“Nationalsprache”や“Staatssprache”に相当する日本語として明治期に考えられたのが、現在の私たちにはあまりにも親しい言葉となっている「国語」というものである⁶⁾。西洋から国民国家という思想を積極的に受け入れた明治以降の日本においては、国語という言葉が「一国一言語」、「単一言語の国家」という幻想を国中に普及させるのに大いに貢献したはずである。さらに日本においては、国語という言葉の上に「母」という文字が据えられて、「母国語」という言葉まで生み出されている。「母国語」のいかがわしさは、母語という言葉の純粋性と比べれば明らかである。

母国語とは、母国のことば、すなわち国語に母のイメージを乗せた扇情的でいかがわしい造語である。母語はいかなる政治的環境からも切りはなし、ただひたすらに、ことばの伝え手である母と受け手である子供との関係でとらえたところに、この語の存在意義がある。母語にとって、それがある国家に属しているか否かは関係がないのに、母国語すなわち母国のことばは、政治以前の関係である母にではなく国家にむすびついている⁷⁾。

以上が、母語誕生に関する歴史的背景と、その後母語から国語や母国語という言葉が派生してゆくことになった歴史的経緯の概観である。こうして私たちはようやく、多和田葉子が言うところの「エクソフォニー——母語の外へ出る旅」に出かけることになる。

*

多和田の母語からの脱出が実際どのような経過をたどり、そして、どのような変化を彼女の言語世界にもたらしたかを、ここでは彼女の小説とエッセイを手掛かりに考えてみたい。

1982年ドイツのハンブルクにたどり着いた彼女は、そこの書籍の取り次ぎと輸出をしている会社で働くことになるのだが、その時の特異な言語体験を次のように語っている。

日本語をまったくしゃべらないうちに、半年が過ぎてしまった。日本語がわたしの生活から離れていってしまった感じだ。手に触れる物にも、自分の気分にも、ぴったりする日本語が見つからないのだった。外国語であるドイツ語は、ぴったりしなくて当然だろうが、母国語が離れていってしまうのは、なんだか霧の中で文字が見えなくなっていくようで恐ろしかった。わたしは、言葉無しで、ものを感じ、考え、決心するようになってきた⁸⁾。

「言葉無しで、ものを感じ、考え、決心する」というのは、言葉とモノと意味の関係が完全に崩壊した状態のことであって、それはあたかも自己と世界の関係が混沌とした未分化の状態に立ち返ったかのようである。

そのうちわたしは、この言葉のない生活をドイツ語や日本語に<翻訳>するようになって来た。わたしが昔使っていた日本語は、一度死んで、別のからだで生まれかわってきたかのようだった⁹⁾。

ここでは、時間の経過とともに言葉のない状態からの回復が図られていることがわかるが、一度壊れてしまった言葉とモノと意味の関係はもう元の無傷の状態には決して戻らない。本来母語が持っていた対象との始原的・直接的関係性が失われてしまったために、それを回復するためには、まるで異質な言語に<翻訳>するかのような困難な作業が今度は必要になってくる。そのため、「こんな日本語では、変に思われるだろうが、とにかく今のわたしの目に見えている世界は、この日本語でないと書けない」という切実な思いで書かれたのが、『かかとを失くして』という作品なのである。

「かかとを失くして」は、かかとのない人間なんていないという気持ちと、かかとなんてなくても立派に暮らせるという気持ちが前提になっている。かかとのない小説が、書きたかった。かかとのない小説とは、自分の関わっている伝統を無視して自由に放浪する文学のことではない。かかとのない文学とは、つまさきが地に着いているからこそ、絶えずころびそうになっている文学ではないかと思う。そして、ころびそうな人間というのはわたしにとって、どっしり座りこんでいる人間よりも、ずっと面白い人間なのだ¹⁰⁾。

かかとのない人間とは、例えば多和田自身のように異国にあって母語を失うことを経験した人間のことだが、文化や伝統、あるいは社会一般のあらゆる

要素の基礎となるべき母語の喪失は、その人のアイデンティティの危機さえも招くことになるであろう。例えば『ペルソナ』という作品では、ドイツに留学中の日本人女性が異質なものを排除し理解しようとしないうドイツ人という他者の視線にさらされて、次第に自分というものを失ってゆく。ドイツ人の目から見れば東アジアの「ベトナム人」、「タイ人」、「フィリピン人」、「韓国人」の間には何の差異もないのだが、他方日本人の中にもアジアの彼らと同一視されたくはないという思いがあるものだから、その結果差別の構造が幾重にも複雑化されてゆく。主人公の道子は克服が困難で、しかも交錯する文化的差異のただ中であって、自己の固有のペルソナ（アイデンティティ）を見失ってゆくのである。異文化の中で暮らすということは、母語であれ、自己のアイデンティティであれ、それまで本質的で自明なものとしてあったものが、他者の視線を浴びて解体の危機に晒されるということである。

だが、作者の多和田自身はそのことを必ずしも否定的にはとらえていない。先の引用にあるように、むしろ「ころびそうな人間」としてあることを積極的に評価しようと考えているのである。そこには、多和田の言語と人に対する独特の関心があるように思われる。例えば、ドイツ滞在の理由として彼女は次のようにも語っている。「ドイツ語がべらべらになりたいというのではなく、何かふたつの言語の間に存在する〈溝〉のようなものを発見して、その溝の中に暮らしてみたいと漠然と思っていた。」

ドイツ語と日本語という「ふたつの言語」の間の文化的・社会的・言語的差異そのものを意味する〈溝〉の中での経験は、ドイツで出版された“Talisman”（お守り）という本の中の小編“Von der Muttersprache zur Sprachmutter”（母語から語母へ）で、作者自身の貴重な言語体験として極めて印象的に語られているので、ここではそれを改めて追体験してみることにしよう。

言葉をめぐる彼女の特異な体験は、ドイツの勤め先である書籍の輸出及び取り次ぎ会社というごく日常的な労働の場から始まっている。

例えば、ドイツの鉛筆が日本のものと違うようなことは、ほとんどなかった。でもそれは、もう「鉛筆」ではなくて、“Bleistift”と呼ばれるものであった。この“Bleistift”という言葉は、今や私が新しい対象に出会っているかのような印象を与えた。私は鉛筆を新しい名前では呼ばなくてはいけないことに、ちょっと恥じらいを覚えた。

それは恐らく、結婚した知人の女性を彼女の新しい姓では呼ばなくてはならないときに覚えるような感じに近いものであった¹¹⁾。

モノ自体としては同じものであるはずなのに、その名称が日本語の「鉛筆」からドイツ語の“Bleistift”が変わるとき、モノと自分との従来の関係に亀裂が生じてしまうのである。これはやがて作家になるべき多和田にとっては衝撃的な出来事であったろう。母語においては疑うことのなかったモノと言葉と意味の一体化された関係が、異言語の世界に移り住んだことによって揺らぎ始め、この三者の関係が特定の言語内において恣意的に形成されているに過ぎないことを知ったからである。これは、母語の神話性とそれに無自覚に依存しているはずの自己像の崩壊を促すものである。疑うことのなかった言葉はその安定性を失い、同時に、人は己のアイデンティティの保持に危惧を覚え始める。しかしそれはまた思いがけず、これまでになかった言葉の自由をもたらしてくれるのであった。

文具に関連する中で、私のお気に入りにはステープル外し（der Heftklammerentferner）であった。その素敵な名前は、外国語に対する私の憧れを体現するものであった。4本の牙をもつ蛇の頭を連想させるその小さな装置は、文具の仲間でありながら文盲である。ボールペンやタイプライターと違って、それはひとつの文字も書けないからであ

る。ただステープルを外せるだけである。でも、私はそれが特別に好きだった。ひとつにまとめられた紙をばらばらにするときに、それはまるで魔法使いのように見えるのだった。

母語 (Muttersprache) の中では、言葉が人間に張り付いてしまっている。そのため、言語に遊戯的な喜びを感じることはまれである。そこでは思考が言葉に固着しており、思考も言葉も自由に飛び立てなくなっている。しかし、外国語の中には「ステープル (Heftklammer) 外し (Entferner)」のようなものがあり、互いにくっついて絡み合っていたものをみんな解き放ってくれるのである¹²⁾。

母語の喪失とアイデンティティの危機を体験する一方で、母語の世界ではありえなかったような思考と言葉の自由を多和田は今実感しているところだ。そのことが「母語から語母へ」という逆転された言葉で象徴的に表されているのだが、「語母」(Sprachmutter) とはもちろん「母語」(Muttersprache) から作られた彼女の造語である。その「語母」が擬人化され具象化されたモノが、言葉を生み出す (叩き出す) 装置の事務用タイプライターであるとは面白い。

彼女はその大きくて広い体に刺青を施しており、そこにはアルファベットのすべての文字が見られる。彼女の前に座ると私は、彼女が私に言葉を提供してくれているような気持ちになった。彼女が私に言葉を提供してくれたとしても、ドイツ語が私の母語ではないという事態に何の変更もないのだが、でもその代わりに私は新しい「語母」(Sprachmutter) を手に入れたのである¹³⁾。

「語」の「母」たる「語母」を新たに獲得するということは、多和田にとって「新しい言語の養女」になることを意味しており、そのため彼女は別の生を新たに生きることになる。

新しい「語母」(Sprachmutter) を持つという

ことは、二度目の幼年時代を体験するというものである。子供時代には言葉が文字通りに知覚される。そのことによって単語のひとつひとつが独自の生命を持つようになるのだが、でもそれは、文脈の中で規定されるようなその単語の意味とはまったく別のものである。あたかも神話の世界の形象のように、その生涯の物語を独自に展開できるほどに生き生きとした言葉が存在するのである¹⁴⁾。

例えば、

“Oh, mein Gott!” (おやまあ！)

“Ach, du lieber Gott!” (これは大変！)

“Gott sei Dank!” (やれやれ！)

“Um Gottes Willen!” (とんでもない！)

などの慣用句に見られる“Gott”という言葉は、普通のドイツ人であればその語の本来の意味はすでに失われており、今は単に形式的に使われているだけなのだが、「新しい言語の養女」となった多和田にはそうは思えない。“Gott”が文字通りに「神」として知覚され、「私を支配しようとする大きな力」を感じてしまう。そのため彼女は、“Gott”という言葉をもう気楽には使えなくなってしまうのであった。

他にも例えば、非人称主語の“es”は

“Es regnet.” (雨が降る。)

“Es geht mir nicht gut.” (調子よくないです。)

と使われるのだが、“es”に特別の意味はない。ところが、多和田はそうは考えない。

人が“Es regnet.” (雨が降る) という瞬間には、空から水を注ぐ“es”が実在するのである。“Es geht mir nicht gut.” (調子よくないです) というときには、それに関わる“es”が存在するのである。しかし、それには誰も特別の注意は向けない。それ独自の名前すらない。でも“es”はいつもいろいろな所で熱心に律儀に働いており、文法上の隙間の中でひっそりと生きているのである¹⁵⁾。

「あたかも神話の世界の形象」のように「単語の

ひとつひとつが独自の生命を持つ」というドイツでの言語体験は、多和田の日本語の創作活動にも大きな影響を与えることになる。例えば、芥川賞受賞作『犬婿入り』の文庫本の解説では、与那覇恵子は次のように述べている。

しかし『犬婿入り』の面白さは何と言っても<異物>を表出する言葉の噴出感であろう。とくに太郎の表象は「犬婿」という言葉が生き物のように一つの人格となって現出されている。「犬婿」というイメージとエクリチュールとの一致は滑稽なユーモアを醸し出している。言葉が伝達的手段を超えて<もの>の本質として屹立する言語空間が立ち現れているのである¹⁶⁾。

確かに、人間界に人として現れたはずの太郎が、みつこの首に歯をあてがい音を立てて吸ってみたり、彼女のお尻を舌でぺろぺろ舐めるといような犬の行動を幾度も繰り返しながら、どんどん<異物>の姿に変わってゆく時の「言葉の噴出感」は圧倒的であり、「神話の世界の形象」のように言葉が「<もの>の本質」となってゆく様を実感することができよう。「語母」を得ることによって「新しい言語の養女」となった多和田は、日本語とドイツ語という二つの言語の境界を越えたところで自らの言葉を繰り出し始めたかのようである。

*

多和田はまずは国外に出ることによって、近代の国民国家という枠組みの中で誕生し、学校教育という制度の下で習得された国語や母国語、つまり私たちの「日本語」の世界を脱出する。次に、長期間異文化の中に住み異言語を学ぶことによって、生後以来自然に獲得されたはずの言葉、つまり「母語」を一度は失うことになる。彼女の場合、これらすべて

の事は自ら決断し選択した事柄であったはずだが、無論だからといってそのことによって彼女が無傷でいられるはずもない。今の自分を語るべき言葉もないという状態を体験せねばならなかったし、依るべき制度としての国家も、さらには母語も失って、深いアイデンティティの危機を経験することになる。しかし、そうした代償を払うことによって彼女は、「語母」と呼ばれる彼女独自の新しい言語手段を獲得するのであった。それは、言葉とモノと意味との関係が一度は徹底的に解体された後に、新たに形成された創造的言語空間である。日本やドイツにおいて日常的に使用されている母語（あるいは母国語や国語）としての日本語やドイツ語は、私たちがただ気付いていないだけで、それぞれ歴史的・社会的な諸条件の下にあり、つねに目に見えない形で規定されている。多和田は二つの言語の境界、つまり彼女の言う<溝>に深く身を置くことによって、日本語とドイツ語を同時に解体的に相対化し、今やその表現方法でそれぞれの母語話者を驚かせるような存在になったのである。本論冒頭で田中克彦の『ことばと国家』を参考に、母語概念の発生、近代に生じた母語から母国語・国語への変化という具合に私たちの言葉の歴史をたどってみたのだが、多和田葉子の試みはそうした歴史の流れをあえて逆に辿っているかのようである。今や彼女は「新しい言語の養女」となることを決心したのだが、それは言葉とモノと意味の関係が解体した後の始原的未分化の状況の中で、再度その関係を構築しようとする彼女の創造的試みである。従って「エクソフォニー——母語の外へ出る旅」とは、結局、時間と空間の重層化された制約を振りほどきながら絶えず自らの創作言語を「選び取って」ゆくという半永久的な文学行為のことなのである¹⁷⁾。

註

- 1) 多和田葉子『カタコトのうわごと』青土社、1999、p.32
- 2) 多和田葉子『エクソフォニー——母語の外に出る旅』岩波書店、2003、p. 3
- 3) 田中克彦『ことばと国家』岩波書店、2006 (1981)、p.29
- 4) 同上 p.36
- 5) 同上 p.108
- 6) 同上 p.108 田中によれば、当時「国家語」という訳語もあったらしい。
- 7) 同上 p.41
- 8) 多和田葉子『カタコトのうわごと』、p.11 多和田はこの本の中ではまだ「母語」という言葉は使っていない。
- 9) 同上 p.12
- 10) 同上 p.12
- 11) Yoko Tawada “Talisman” (Konkursbuchverlag Claudia Gehrke 1996), p. 11
- 12) *ibid.*, pp. 14–15
- 13) *ibid.*, p. 13
- 14) *ibid.*, p. 13
- 15) *ibid.*, p. 14
- 16) 与那覇恵子「<間>をめぐるアレゴリー」、『犬婚入り』講談社、2003 (1998)、pp.146–147
- 17) 多和田葉子『エクソフォニー——母語の外に出る旅』、p. 7

